

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Bataa Ganbold

出身地：モンゴル・ウランバートル

所属：財務省金融政策調整課課長代理

日本滞在：2007年10月15日～2008年6月14日

サムライの左か、「右へ倣え」か？

バター・ガンボルド

私は、日本の大学院に留学したり、長期・短期あわせて五、六度来日したことがあるため、今では日本人の文化や生活様式について、驚いたり、肯定的にも否定的にも強い印象を受けることはなくなっている。もろもろの事柄にある程度慣れたことによつて、カルチャー・ショックを受けるには「問題ナシ」のレベルに至ったからだと思ふが、それでも以前には、日本人の気質や身の回りに関して、あれこれと新しい経験をしたのを思い出す。

一九九九年九月にアジ研の研修生として初めて来日したときは、まさにカルチャー・ショックを受けた。日本に関する当時の私の印象を控え目に書けば、「人々は非常に礼儀正しいが、こちらの質問には決してハッキリ答えてくれない。若者はとてもオシャレだが、時々やり過ぎてるように見える（当時は、髪をありとあらゆる色に染めたり、ガングロが流行っていた）。通リや駅、乗り物はとても清潔で、食べ物は総じて、甘味が少々強い」というものだった。また、テレビ番組はその国のさまざまな多様性を映す鏡であり、だからこそ、他国で生活を始めたばかりの人は、時間があればまずテレビを見るのだと考えている私は、

日本語が全く解らなくても、来日当初はよくテレビを見ていた。私の部屋に備え付けのテレビでは、二局を除くと全ての番組が日本語のみで放送されていた。ほとんどが料理やお笑い番組、あるいはあまり興味をそそられないものだと判ると、ヒマな時にはスポーツ番組を見ることが多くなった。

一方、なかなか慣れることができず、頭の中で「ヘンだ」と常に違和感を持っていたのは、車が左側通行だということだ。モンゴルでは、ハンドルがどちらについていようと車は右側通行なので、正反対の日本に来るとよく戸惑った。私はしょっちゅう、通リや駅、アジ研の中でも、自分とは反対側に向かう人の流れに突進してしまった。ウィキペディアで検索すると、地球上で左側通行を採用している国々は、日本やイギリス、その旧植民地など約二五%と少数派で、今や転向組も含めた右側通行が多数派になっている。はるか昔に左側通行が優勢だった理由は、ほとんどの人が右利きだったこと、また、騎士や日本のサムライが、敵に利き手を近付けると同時に刀の鞘を遠ざけておこうとすると、右側通行では不都合だったからだと言われている。つまり、右利きは左側に帯刀するので、馬の乗

り降りには右側からだと言われ、左側からでは道の真ん中、ということになってしまったため、通行・乗降ともに簡単な左側で定着したらしい。

しかしその後、多くの国が左側通行から右側通行に変更したのもつともな理由とは、隣国と制度を一致させることの利便性だとかで読んだ。国境を越える移動が増えるにつれ、近隣諸国と同一の制度を適用することは、移動に伴う安全性を高めもする。一方、日本やその他少数派の国々は、島国であったり、国境での往来に接しないため、制度を変えずに今日に至ったというわけである。

言うまでもなく、私の滞在中には他にも面白い経験がたくさんあるが、不快に思ったことはほとんどない。こうしたさまざまな思い出は、私の心の中に永遠に残り続けるだろう。

（前海外客員研究員／訳＝柏原千英）